

社会福祉法人さぼうと21

2014 年度 東日本大震災関連支援事業 活動報告

2015 年 4 月 30 日現在

東日本大震災発生から 4 年が経過しました。当会では、サンキョー株式会社 様をはじめとする皆様方のご支援のもと、姉妹団体の AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会] (以下、AAR) と協力して、岩手、宮城、福島 の 3 県において支援活動を続けてまいりました。再建の道のりは地域によって大きく異なります。特に福島県では、地震と津波による被害に加え、原子力発電所の事故の影響で県内外での避難生活を未だに余儀なくされている方が多くいらっしゃいます。時間の経過とともに、日常生活において新たな課題が生じたり、困難が深刻化していることもあります。次年度も引き続き、被災された方々の生活再建のために活動を継続したいと考えております。

(1) 物品寄贈

宮城県石巻市の住民集会所に防災用品等の備品を寄贈

(2014 年 5 月完了/石巻市寄磯地区に再建された集会所に、非常用品と備品を提供)

牡鹿半島の北端に位置し、太平洋に突き出した風光明媚な石巻市寄磯浜は、石巻市中心部から車で 1 時間余りのところにあります。良質なホヤやホタテ、ウニの養殖産地として有名でしたが、東日本大震災の津波により集落と漁港が甚大な被害を受けました。津波は最大で約 20 メートルに達し、98 世帯中 35 世帯が全壊、漁港の防波堤は水没。養殖筏、加工施設 (水産物処理センター)、倉庫などの漁業施設も全壊し、約 90 隻あった小型船外機船は全滅、漁具の大部分が流されました。

漁師町の寄磯は住民同士の結束が強く、震災前は漁業組合の「漁民センター」(集会所として利用) がコミュニティの拠点となっていました。同センターには子どもたち、青年団、婦人会、老人会などさまざまな世代の住民が集まり、親睦会を行ったり、地域の伝統芸能である「獅子舞」や冠婚葬祭の会場としても活用されてきました。一方で、防災無線や防災機器の保管場所及び一時避難所となっており、地域の重要な防災拠点としての機能も併せ持っていました。

津波により、コミュニティの拠点だったこの集会所も全壊しました。2013 年に入ってようやく再建に向けた動きが本格化し、ドイツ政府の支援で、ドイツ赤十字から日本赤十字を通じて新しい集会所 (「海友館ドイツハウス」と命名) が建設されることになりました。しかし、緊急時用の防災用品をはじめ、支援金で揃えられない備品があり、2013 年から寄磯地区で支援活動をしてきた AAR にご相談がありました。

現在の地域人口は寄磯浜と前網浜合わせて約 400 名、120 世帯。大多数は漁業関係従事者で、高齢化が進んでいます。漁港は工事中で、漁船、漁具、倉庫も未整備、33 世帯が未だ

に仮設住宅で暮らしており、備品購入のための十分な収入が得られないとのことでした。

そこで、集会所の開設に間に合うよう、足りない備品や緊急時用の防災用品を提供し、開所と同時に利用可能な環境を整えることになりました。ご要望に基づき、集会所の必需品であるスリッパや座布団、大皿などを中心に、寝袋やLED ランタン、ガスコンロといった非常用品も支援しました。また、老人会や婦人会の話し合いの間、子どもたちが読書やオセロなどをして過ごせるよう、書籍と卓上ゲームもお贈りしました。

新集会所「海友館ドイツハウス」は2014年4月12日に落成式を迎えました。訪れたAARスタッフに、「集会所ができる日を楽しみにしていました。もう引退している身なので、仲間たちとこれから親睦会を定期的で開催します。細部までこんなに気を配ってもらえて、本当にありがたく思います」と元老人会会長の方が話してくださいました。

寄磯浜の特産だったホヤは、東日本大震災で壊滅状態に陥りました。ホヤは出荷できる大きさになるのに3年かかります。震災後に種付けされたホヤが、今シーズンにようやく収穫されたところです。待望のホヤ漁再開に住民全員が喜び、集会所で再開を祝ったと伺いました。大津波の被害から4年。困難を抱えつつも、地域の再生に向けてホヤ漁再開とともに一步一步進もうとされている住民の方々を今後も応援したいと考えております。



左下の記念プレートには、協力団体としてAARとさぼうと21の名前も記載されている。

(2014年4月12日)



新集会所の外観(左)

落成式を楽しみに待つ老人会の方々(右)

(2014年4月12日)

支援先：石巻市寄磯地区集会所「海友館ドイツハウス」

宮城県石巻市寄磯浜五梅沢 29 番地 2

(石巻市寄磯地区振興会 会長 渡辺 洋悦氏)

支援内容：非常用寝袋、非常用 LED ランタン、ガスコンロ、折り畳みコンテナ
卓上ゲーム(将棋、囲碁、オセロ)、座布団、スリッパ、書籍、大皿
紙コップ

納品日：2014年3月25日

※支払い完了が5月のため、2014年度の活動報告/会計報告に含む

協力：AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]

東北3県への書棚寄贈

(2014年6月完了/岩手県・福島県・宮城県の保育施設等に、寄贈された書籍と、購入した本棚を提供)

2014年6月、株式会社銀の鈴社様より書籍2,546冊をAARにご寄贈いただき、岩手県、宮城県、福島県の保育施設及び障がい児施設合計25ヵ所にお贈りすることになりました。その際、各施設への書籍の送料を当会が負担しました。また、20施設において書籍を納める収納ボックスが必要となったことから、本棚の購入費用も負担いたしました。

寄贈先の一つである「福島県ばんだい荘わかば」をAARスタッフが訪ねると、たくさんの絵本や物語、詩集が並べられた本棚から、児童たちが読む本を選んでいるところでした。入ってきたスタッフに気づかない程、熱心に書籍を読んでいる児童もいました。職員の方

からは、「ポエムが気に入ったようで、1冊1冊じっくり読んでいます。たくさんの書籍に書棚までいただき、本当にありがとうございました」とのお言葉をいただきました。

また、「小島保育園」の園長先生からも、「子どもたちに読み聞かせをすると、目をキラキラ輝かせています。そして、次回の読み聞かせを楽しみに待っているようです」と、感謝のお言葉を頂戴しました。



熱心に本を選ぶ福島県ばんだい荘わかばの児童(2014年7月17日)



寄贈本を手にして喜ぶ小島保育園の園児たち(2014年7月10日)

■寄贈先一覧

	寄贈先 団体名	施設名	所在地
1	社会福祉法人光林会	るんぴにい美術館	岩手県花巻市
2	NPO法人 幸創	たけちゃんち	宮城県多賀城市
3	NPO法人 幸創	まーちゃんち	宮城県仙台市
4	社会福祉法人牧人会	発達支援センター「ひかり園」	福島県南会津郡
5	特定非営利活動法人ほっとアクト	生活介護事業所「あるく」	福島県西白河郡
6	特定非営利活動法人オハナ・おうえんじゃー		福島県本宮市
7	社会福祉法人白河学園	つぼみ園	福島県白河市
8	社会福祉法人福島県社会福祉事業団	福島県ばんだい荘わかば	福島県耶麻郡1
9	社会福祉法人 希望の杜福祉会	のんびりハウス	福島県いわき市
10	有限会社 介護じゃんけんぽん	じゃんけんぽん泉	福島県いわき市
11	社会福祉法人 誠心会	ちゃーむ	福島県いわき市
12	特定非営利活動法人 子どもの家	第2子どもの家M・A・Y	福島県いわき市
13	社会福祉法人 いわき福音協会	小島保育園	福島県いわき市3
14	社会福祉法人つくし会	スギナ保育園	福島県郡山市
15	社会福祉法人梅の木福祉会	梅の木保育園	福島県郡山市
16	社会福祉法人千葉福祉会	八山田保育所	福島県郡山市
17	たかだ保育園		福島県郡山市
18	たんぽぽ保育園		福島県郡山市
19	光ベビーホーム		福島県郡山市
20	社会福祉法人聖母愛真会	こじか子どもの家	福島県郡山市
21	社会福祉法人ほっと福祉記念会	遊	福島県郡山市
22	社会福祉法人プラナの森	児童デイサービスはるにれ園	福島県須賀川市
23	社会福祉法人昌平覺	児童養護施設いわき育英舎	福島県いわき市
24	社会福祉法人 児童養護施設青葉学園		福島県福島市
25	特定非営利活動法人ふよう土2100	交流サロンひかり	福島県郡山市



オハナ・おうえんじゃーに届いた絵本を楽しむ子どもたち(2014年6月12日)

支援先：岩手県・宮城県・福島県の保育園と障がい児施設 25カ所
(上記一覧表参照)

支援内容：株式会社銀の鈴社から AAR Japan を通じて上記施設に寄贈された書籍 2546 冊の送料 及び、収納のための本棚 20 点 (20 施設宛)

実施期間：2014年5月～6月

協力：AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]

被災地の子どもたちが屋内で学べる英会話カルタの寄贈

(2014年9月完了/福島県・宮城県の保育施設等に、英会話カルタ教材合計136点を提供)

福島県では、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の影響を考慮し、現在も子どもたちの屋外活動を制限している保育施設や障がい児施設が少なくありません。そこで、室内で過ごす時間が長くなった子どもたちや、長期に渡って避難生活を送る子どもたちが楽しく遊びながら学べる教材として、英会話カルタを支援することにいたしました。

ニーズ調査の結果、福島県の学童保育施設8カ所のほか、宮城県の保育施設4カ所も加え、合わせて12施設にカルタのセットを提供。子どもたちは付属CDを聞きながら英語の発音を学び、リズムカルな音を楽しみつつ語句を覚えることができるようになりました。中には、

カルタを拡大コピーして児童全員で英語を発声する時間を設けるなど、英語教育に力を入れている施設もあります。



放課後子ども教室の児童たち。カラフルでかわいらしい絵が子どもたちに大人気です。
絵札と字札(英語と日本語)で、身近な英語表現を楽しく覚えられます。
(相馬市立桜丘小学校、2014年9月4日)

宮城県ピノッチオ保育園の園長先生からは、「子どもたちが楽しく英語を暗記できるというのがとても良いです。たくさんの種類のカルタをいただき、いろいろな英語を学べて大変ありがたいです」との感謝のお言葉をいただきました。また、福島県の相馬市立桜丘小学校放課後子ども教室の先生は、「子どもたちはカード遊びが大好きなので、こんなに楽しいカルタをいただけて大変嬉しいです」「CD をたくさん聴いて子どもたちと一緒に発音を覚えていきます」と語ってくださいました。

■寄贈物品数と受益者(児童)数

都道府県	寄贈先 施設名	児童数	寄贈カルタ数
宮城	①ピノッチオ保育園	70	4種 36点
	②ブルーバード保育園	75	4種 36点
	③学童クラブぴのっちお	20	4種 12点
	④リーローズ英語クラブ	4	4種 12点
福島	⑤相馬市立中村第二小学校 放課後子ども教室	37	1種 5点
	⑥相馬市立山上小学校 放課後子ども教室	23	1種 5点
	⑦相馬市立玉野小学校 放課後子ども教室	56	1種 6点
	⑧相馬市立八幡小学校 放課後子ども教室	26	1種 5点
	⑨相馬市立飯豊小学校 放課後子ども教室	14	1種 5点
	⑩相馬市立磯部小学校 放課後子ども教室	76	1種 6点
	⑪相馬市立日立木小学校 放課後子ども教室	6	1種 4点
	⑫相馬市立桜丘小学校 放課後子ども教室	5	1種 4点
合計		412人	136点

支援先：福島県・宮城県内の保育園、学童保育施設等 12 施設
(上記一覧表参照)

寄贈品：英会話カルタ(シリーズ 1~5) 合計 136 点と付属 CD12 点
鷺田マリ 作、北村麻由美 絵

発売元 マリ企画(京都府舞鶴市)

シリーズ 1~5、各 絵札 44 枚・字札 44 枚 3 歳以上対象

実施期間：2014 年 5 月~9 月(完了)

協力：AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]

福島県相馬市の児童センターに読み聞かせ用の大型絵本を寄贈

(2014年10月7日施設訪問・大型絵本11点の贈呈式)

相馬市及び南相馬市における相談支援のニーズ調査中（**(3) 相談支援活動** を参照）、地域の児童館で読み聞かせ用の絵本が不足しているのご要望がありました。放射線量を常に気にしなければならない状況下、子どもを外で遊ばせることを心配する家族が多く、親の仕事で、児童館で過ごす子どもが増えているようです。必然的に屋内での遊びが多くなり、施設の砂場も建物の中に設置されている状態が続いています。より多くの子どもたちが楽しめるよう、地域の児童館同士で絵本を貸し借りしていますが、冊数が足りず、特に人気の高い大型絵本は傷みが激しいものが多いことがわかりました。

そこで相馬市内の書店を通じ、皆が一緒に楽しめる大型絵本（主な寄贈本：『はらぺこあおむし』『三びきのこぶた』『おおきなかぶ』『ねずみくんのチョコッキ』『ちからたろう』など11点、サイズ：約36cm×50cm他）を「相馬中央児童センター」に寄贈いたしました。絵本が届いた数日後、当会事務局長が同センターを訪問すると、30名ほどの低学年の児童が、放課後の「児童クラブ」活動に参加するために集まっていました。大型絵本は迫力があり視覚的効果も高く、ページをめくるたびに驚きや発見があって、子どもたちに大人気でした。日頃は大人が子どもに読み聞かせるのですが、この日は子どもたちが次々に本を手にし、交代で読み聞かせを披露してくれました。



左) 中央児童センター前(2014年10月7日)



右) 大型絵本に興味津々の子どもたち

「みんなで一緒に読めてうれしい！」



児童センター内部に設けられた砂場遊びスペース
今も屋外で遊べない状況が続く。



施設付近のガイガーカウンター(放射線測定器)
数値は天候による変動が大きい。

寄 贈 先 : 相馬市中央児童センター
寄 贈 品 : 読み聞かせ用大型絵本 11 点
贈 呈 式 : 2014 年 10 月 7 日
協 力 : AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]

岩手県釜石市の中学校への楽器支援

(2014 年 10 月、岩手県釜石市立大平中学校にトロンボーン 1 本を寄贈)

岩手県釜石市^{おおだいら}立大平中学校は、東日本大震災により甚大な被害を受けた釜石市内にあります。高台にあったため津波による流出は免れましたが、釜石湾は目と鼻の先。辺り一帯が浸水して一時は陸の孤島となり、数十名の生徒や教職員が救助を待ちました。その後も避難所の一つとして、度重なる余震と寒さが続く中、人々が身を寄せ合いました。

当時在籍中の生徒の多くも被災し、家族や親族に犠牲者が出ました。今も仮設住宅から通学する子どもたちがいます。震災から時間が経つにつれ、東京などから見えにくい課題として、被災地の住民の間で貧富の差が拡大しているという現実があります。職場を失い、収入がなく、失業手当の支給対象となる家族が増えているのです。

非常に厳しい状況に置かれている岩手県の被災地の子どもたちへの支援として、当会はこれまで、主に教育面での支援を続けてまいりました。その一環として、2013 年 12 月、大平中学校及び同じ釜石市立の^{かつし}甲子中学校にて、日本の伝統音楽に触れてもらう企画を AAR と協力して実施。両校生徒約 220 名を対象に、囃子大倉流大鼓方能楽師の大倉正之助さん(重要無形文化財総合認定保持者)による鼓の講習会を開催しました。

2014 年度、大平中学校の吹奏楽部が「第 48 回釜石市民吹奏楽団定期演奏会」（11 月 30 日開催）に出演することが決まりましたが、管楽器のひとつ テナートロンボーンが補充されないままになっていました。そこで、震災で破損した楽器の修理を行ってきた「大船渡楽器サポート」を通じてテナートロンボーン 1 本を購入し、同校にお贈りすることにしました。

地震発生時に校内で破損した吹奏楽器は学校予算で補充されましたが、トロンボーンは、担当の生徒が練習のために自宅に持ち帰っていたところ、津波によって家具等と共に流失。このような楽器は補充対象とならず、大切な楽器を失った生徒は、近隣の学校の吹奏楽部から毎回借りて練習を続けてきました。



大平中学校の文化祭で披露された吹奏楽部の演奏

(2014 年 10 月 26 日)



トロンボーン担当の女子生徒。新しい楽器を手にして、早速、練習を開始

(2014 年 10 月中旬)

震災以降、釜石市には全国から数万人のボランティアが集まりました。大平中学校の生徒たちもまた、これまでに市内のボランティア活動に積極的に参加するなど、生まれ育った地域の復活のために、自ら行動しています。2013年末の大倉正之助さんの講習会に参加して、「大倉先生に命の大切さや人と人との『縁』というお話をしていただき、とても心にしみました。出会っていく一つ一つの縁を大切に、今を生きられていることに感謝して成長していきたい」と語ってくれた生徒たち。地震と津波で深い傷を負った子どもたちが、演奏会を通じて自分の想いを表現する場を経験しつつ成長していくことを願っております。

支 援 先 : 岩手県釜石市立大平中学校 吹奏楽部
学校住所 : 岩手県釜石市大平町 3-6-1
部 員 数 : 男子 4 名、女子 12 名 合計 16 名
寄 贈 品 : ヤマハ テナートロンボーン YSL-620 ケース付き 1 本
納 品 日 : 2014 年 10 月 2 日
納 品 : 大船渡楽器サポート

(2)被災地域の行事運営支援

宮城県石巻市北上町十三浜 吉浜・熊野神社の祭り「神輿渡仰」の開催

(2014 年 4 月 27 日開催)

宮城県石巻市北上町十三浜は北上川の河口に位置しています。山々が海岸近くまで迫り、入り江や湾が多く、複雑に入り組んだ海岸線が続くリアス式海岸になっています。その中の集落のひとつ、吉浜には熊野神社のお祭りがあり、4年に一度、重さ200kgを超える神輿を若者20名が担ぐ「神輿渡仰」という伝統行事が130年以上続いてきました。神輿を担いで100段以上の階段を降りたり、前後の担ぎ手が互いに神輿を強く押し合い力を競ったりと、荒々しさが祭りの見どころです。しかし、少子化の進行で担ぎ手の確保が困難となり、2001年の開催を最後に途絶えていました。

吉浜には、東日本大震災の発生前は56世帯が暮らしていましたが、津波による壊滅的な被害を受けて地域一帯が災害危険区域に指定され、人口流出に拍車がかかりました。世帯数が減るにつれて住宅の明かりも少なくなる中、住民の方々の要望を受け、2013年12月にサンキョー株式会社様のご寄付をもとに防犯灯15台を設置いたしました。その点灯式で、「熊野神社 神輿渡仰」のポスターを当会理事長の吹浦 忠正が目にしたことをきっかけに、この伝統行事の復活を目指すことになり、住民（2014年4月時点で15世帯）が一丸となって、約4ヵ月間に渡って準備を進めました。

好天に恵まれた 2014 年 4 月 27 日、13 年ぶりに神輿渡御が行われました。吉浜にお住まいの方のみならず、石巻市外や宮城県外に転出された方々も吉浜に駆けつけ、総勢 60 名ほどの観客が神輿渡御を楽しみました。当会からは樋口 静子（理事）と高橋 敬子（理事・事務局長）が出席いたしました。吉浜自治会には、お祭りへの参加が叶わなかった元住民から多くの応援メッセージが届きました。最大の懸念事項だった神輿の担ぎ手も、吉浜に縁のある方や石巻市の「稲井オヤジの会」の皆様にご協力いただき、28 名も集まりました。

神輿の一行は、災いを除くと言われる「じょうさい」の掛け声を響かせながら、吉浜周辺を練り歩きました。吉浜から約 3km 離れた「にっこりサンパーク」（高台の複合運動施設で、震災当時には災害対策本部が置かれた）の仮設住宅団地の集会所では、40 名前後の住民が神輿の到着を歓迎し、13 年ぶりの荒々しい神輿の揉み合いに大きな歓声を送りました。お祭りのおかげで、散り散りになっていた住民が再びひとつにまとまった、と多くの方が仰っていました。

住民の転出や高齢化によって、多くの方が神輿渡御の復活は困難だと感じていたようです。実行委員長を務めた吉浜自治会長 佐藤 良正様は「準備はとても大変でした。昔と違って実行委員会の人数も少なく、一人ひとりの責任も大きいものでした。そのような中で開催できて本当にうれしく、支援してくださった方々に感謝しています。いつかまた、若い人達がお祭りを復活させてくれることを期待したいです」と仰っていました。

今回最高齢の担ぎ手となった男性は「昔はタイミングが合わず、神輿を担いだ経験がありませんでした。慣例として担ぎ手は 10～20 代の若者と決まっていたのですが、今回お祭りが復活すると聞き、絶対に自分で担ぎたいと思いました。夢みたいな 1 日でした」とうれしそうに話してくれました。また、他の地域へ転出された女性は「また吉浜で神輿渡御が見られるなんて信じられません」と涙を流していらっしゃいました。



左)100 段以上の階段を降りる神輿
右)「原境」での勇ましい揉み合い
道路には工事資材が積まれている。(2014 年 4 月 27 日)



「にっこりサンパーク」の仮設住宅での揉み合い



神輿の行列を導く太鼓



「月浜境」から仮設集会所へ向かう一行



再び戻ってきた熊野神社で、さらに揉み合う



開催日時：2014年4月27日

開催場所：宮城県石巻市十三浜字吉浜 及びその周辺地域

主催：吉浜自治会（会長：佐藤 良正氏）

協力：稲井オヤジの会（代表：千葉 政徳氏）

AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]

(3)相談支援活動

福島県相馬市、南相馬市の仮設住宅訪問<サロン活動>

(2014年7月31日～8月1日視察、10月8日及び12月11日～12日実施)

福島県は前述のとおり、地震と津波による被害に加えて原子力発電所の事故により、未だに多くの方が避難生活を余儀なくされています。中でも仮設住宅には、近親者やご友人を亡くされた悲しみに加えて放射能への不安から、精神的に落ち込んだ状態が続いている入居者が多いと言えます。そこで、長年当会で相談事業を担当している役員が中心となり、被災者の心のケアを兼ねた支援活動を計画いたしました。

まず2014年7月31日～8月1日にかけて、相馬市・南相馬市の行政機関及び、相馬市で活動中の支援団体を訪問して協議を行ったほか、飯館村の障がい者施設、南相馬市（主に小高区）や浪江町の被災地域などを視察し、情報収集とニーズ調査を行いました。

帰還困難区域に指定されている南相馬市の小高区や浪江町では、除染作業を行う業者の重機や作業員の姿が数多く見られました。災害がれきを撤去するには、周囲の除染作業だけでなく、災害がれきや廃棄物の除染も行わなければなりません。また、撤去したがれきの受入先の確保も困難なことから、3年半経った時点でも、作業完了の具体的な見通しが立たない状況でした。



左)行き場のない汚染がれきの山

右)立ち入り禁止区域

(2014年7月31日)





左)「希望の牧場」の被ばくした牛たち
右)帰還困難区域で手つかずになっている
民家
(2014年7月31日)

南相馬市役所の福祉課を訪ねた際には、仮設住宅入居者の生活相談にのっている南相馬市社会福祉協議会（南相馬市 鹿島区）の担当者と協議を行いました。南相馬市は南北に広く、被災者のための仮設住宅・復興住宅も広範囲に及びます。行政は入居者確認作業に追われており、時には警察立会いのもとで安否確認を行うこともあるそうです。独居高齢者の見守り訪問や健康教室の開催なども行われていますが、参加者は毎回ほぼ決まっており、知り合いもなく単身生活を送る入居者の中には、部屋から出てこない方も多いとのこと。

そこで、当会で相談事業を担当している役員と、カウンセラー養成講座を受講したボランティアが中心となり、特に年配の被災者の心のケアを目的として、社会福祉協議会が市内の仮設住宅・復興住宅で行っているサロン活動に協力することにいたしました。

《サロン活動第1弾：被災者の方々の健康維持のために・・・》

南相馬市社会福祉協議会では、外部のボランティアを受け入れて毎週「サロン活動」を行っています。当会が最初に協力したのは、牛河内第二応急仮設住宅（南相馬市 鹿島区）での活動でした。

2014年10月8日、集会所には20名弱の方々が集まっていました。この日は医師による「インフルエンザの季節に向けての注意」、傾聴ボランティアによる「良い眠りについて」などの講座に加え、血圧測定や整体師によるマッサージが全員に施術されました。

次の会場である原町区福社会館（南相馬市 原町区）では借り上げ住宅にお住まいの46名が参加されました。外出する機会の少ない入居者がひとりでも多く参加できるよう、借り上げ住宅から会場までバスの送迎が用意されています。ここでも健康管理のために、医

師による「インフルエンザの季節に向けての注意」の講座や看護学校の学生による血圧測定がありました。また、ボランティアのギターやキーボードの演奏に合わせて「歌を歌うプログラム」や「交通安全を呼びかける旗づくり」など、体を動かしたり声を出したりする活動も盛り込まれていました。

借り上げ住宅では、同郷の方と離ればなれになり、周りに親しいお知り合いもない中で生活を送る方が多く、孤独感を深めていらっしゃる事が懸念されています。当会では、カウンセリング経験が豊富なボランティア2名とともに上記のサロン活動に協力し、参加者の方々が心休まるひと時を過ごしていただけるよう努めました。

活動中にお話を伺った方は、「バラバラになっている同郷の友人と再会して、一緒に過ごすことのできるこのひと時が、いつもとても待ち遠しいの」と、お気持ちを打ち明けてくださいました。

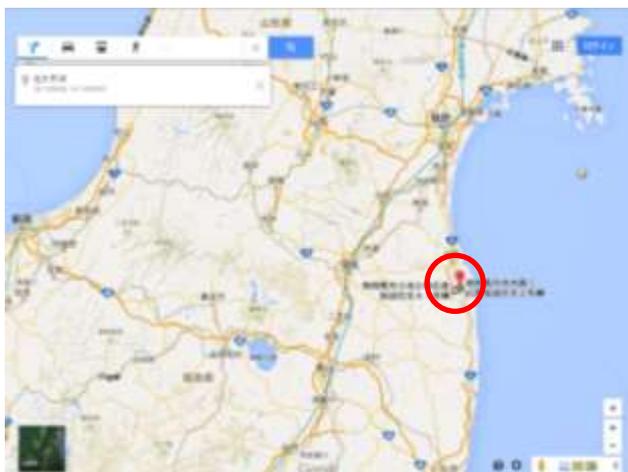


上)室内で過ごす時間が多い
被災者の方に、丁寧に
マッサージ

下)送迎バスで集まった参加者
の方々にお話を伺った。
(2014年10月8日)

《サロン活動第2弾 :みんなで歌おう・風邪予防に「ショウガ湯」!》

12月に入り、本格的な冬を迎えてボランティアも減少傾向にある中、当会で相談事業を担当する役員と、これまでも被災地でボランティア活動をしてきた参加者2名の合計3名で、再びサロン活動に協力いたしました。



2014年12月11日～12日にかけて、南相馬市鹿島区の「寺内第二仮設住宅」と「小池小草仮設住宅」を訪問。室内にこもりがちとなり、日頃体を動かす機会の少ない入居者が、のびのびと声を発し体を楽しく動かすことができるように、「みんなで歌おう」という活動を企画いたしました。当日は約20名が参加し、同行したボランティアが作成した「歌詞カード」を配布。「いつでも夢を」や「瀬戸の花嫁」、「三百六十五歩のマーチ」など、懐かしの歌謡曲を歌い合いました。歌詞に添えられた可愛いイラストや明るいメロディーに、参加した入居者の方々から笑顔がこぼれました。



また、厳しい冬を目の前に、参加者の皆さんにメッセージ付きの「ショウガ湯」と「カイロ」をプレゼントしました。ショウガ湯はお湯で簡単に溶かせるタイプで、カイロと合わせて体を温め、寛いでいただければと企画しました。偶然にもこの日の研修医の健康講座は「ショウガの効用」。皆さん喜んで持ち帰られました。



サロン活動後、南相馬市で一番大きな「よつば保育園」を訪問させていただきました。運営は再開されていますが、震災から4年経った今も、園児たちがのびのびと外で遊べる環境を取り戻すことはできません。戸外での活動は制限され、室内での遊びが中心です。

地元の食に対する不安も大きいようで、保育園では万が一の内部被爆のリスクを避けるため、食材選びに慎重な配慮が求められています。そのため姉妹団体のAARが、園児たちの飲料水と給食用に果物の支援を続けています。



ふたば幼稚園を訪れた日はお茶のお稽古が行われており、園児が点てたお抹茶を頂きました(2014年12月12日)

活動日時：〔第1回〕2014年10月7日～8日
〔第2回〕2014年12月11日～12日

実施場所：原町区福祉会館(南相馬市 原町区)
牛河内第二応急仮設住宅(南相馬市 鹿島区)
寺内第二応急仮設住宅(南相馬市 鹿島区)
小池小草応急仮設住宅(南相馬市 鹿島区)

活動参加者：ボランティア2名 及び 当会役員2名

サロン活動主催：南相馬市社会福祉協議会

その他の訪問先：相馬中央児童センター(相馬市)
よつば保育園(南相馬市 原町区)
南相馬ファクトリー 自立研修所「えんどう豆」(南相馬市 原町区)
※AAR Japan [難民を助ける会]の協力により訪問

(4)被災地の障がい者施設の運営支援

宮城県石巻市で被災した障がい者自立支援団体の運営支援

(2014年11月17日)

被災後、仮設事業所で活動を再開した障がい者支援団体の恒久施設建設に向けて、資金的な協力を行いました。

「地域活動支援センター ころろ・さをり」は、宮城県石巻市の NPO 法人輝くなかまチャレンジド（2005 年設立）が運営する障がい者支援センターです。支援学校を卒業した人たちの居場所づくりや、障がい者の自立支援に努めています。

当初は障がい者に限定せず、織り機を使った手作りの「さをり織り」を一般に広めようという目的で教室を開催していました。次第に障がい者とその保護者の参加が増え、「学校を卒業後毎日通える場所がない」「創作に励んでいると、心が落ち着く」という声が多く寄せられました。そこで無認可の小規模作業所を開設。その後宮城県・石巻市の認可を受け、法改正に伴い、2007年に「地域活動支援センターころろ・さをり」に改称しました。

利用者は10代後半～70代の身体・知的・精神に障がいを抱える方21名（1日当りの通所者は7～8名）で、常勤職員は3名です（2014年10月末時点）。活動内容は、さをり織り創作、レクリエーション（健康体操、カラオケ、音楽、調理実習、茶道等）。さをり織りは個々人の感性を自由に表現し、思いのままに織る手織り。既成概念に囚われず、色彩や素材・織り方に制約がないという点で、障がいを抱える方にも向いています。

2011年3月の東日本大震災発生直後、利用者と職員は、活動していた沿岸近くの賃貸ビ

ルの上層階で、近隣住民とともに約 1 週間の避難生活を送りました。幸い全員ご無事でしたが、活動拠点を失い、しばらくは職員による家庭訪問や病院へのお見舞いが主な活動となりました。6月になって、職員の自宅や福祉避難所で活動を再開。8月には仮設事業所で日中一時支援事業を再開し、現在に至っています。

この仮設事業所は、石巻市の仮設住宅にある支え合い拠点センターの中にあります。市の管轄である同センターの使用時間は 9 時～17 時。17 時には全員退出しなければならず、事務作業の時間が足りません。また、センターでイベントが開催されるたびに織機や設備品を片づけなくてはならない等、常に不安定な条件下での活動を余儀なくされてきました。

関係者の働きかけにより、2015 年 3 月末までの使用延長が認められましたが、利用者の方々のために一刻も早く恒常的な活動拠点を探さなければならないため、当会と AAR にご相談がありました。団体の副理事長が提供を申し出た 100 坪の土地に、自己資金と全国から集まった寄付で事業所を建設したいとのこと。行政の助成金にも申請しています。恒久施設が建設されれば、「仲間と離ればなれになるかもしれない」という不安が解消され、利用者・職員ともに安心してレクリエーション活動や、さをり織りの製品作り、近隣住民との交流を楽しむことができます。夕方以降の職員の事務作業の時間と場所も確保され、日中の利用者のケアにより一層力を注ぐことができるようにもなります。

また、障がい者（特に精神障がいをお持ちの方）は、独りになりたい時が出てきます。現在は仮設住宅の集会所で活動しているため、利用者が独りになれる場所はトイレしかありません。障がいを抱える方々のニーズに応え、車いす対応などの機能も十分備えた施設の建設が必要です。そこで、当会ではこころ・さをりの活動継続を支えるため、新施設の建設に向けて主に資金面で協力することにいたしました。今後も主に AAR を通じて協力していく予定です。

こころ・さをりの仮設事業所が
ある支え合い拠点センター
外観（2014 年 4 月 28 日）



仮設事業所内部
(2014年4月28日)



ころ・さをりのみなさんと当会・
AAR 役員の高橋敬子・柳瀬房子
(後列左から2番目・4番目)、
AAR 東北事務所長の加藤亜季子
(後列一番右)
(2014年10月21日)



利用者がつくったさをり織り
(2013年7月2日)



支 援 先 : NPO 法人輝くなかまチャレンジ
施 設 名 : 地域活動支援センター ころろ・さをり
所 在 地 : 宮城県石巻市蛇田字新金沼 401 仮設恵み野団地
支え合い拠点センター内 (仮設事業所)
事業内容 : 障がい者地域活動支援センター、障がい者日中一時支援
理 事 長 : 庄司 捷彦 氏
利用者数 : 21 名 (うち、日中一時支援事業のみの利用者 3 名)
職 員 数 : 3 名 (他にパートタイム 3 名) ※2014 年 10 月末時点
支援内容 : 寄付 100 万円
(恒久的な事業所の建設費用の一部として)
振 込 日 : 2014 年 11 月 17 日
協 力 : AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]

岩手県大船渡市で被災した障がい者自立支援団体の運営支援

(2014 年 11 月 21 日)

被災後、仮設事業所で活動を再開した障がい者支援団体の恒久施設建設に向けて、資金的な協力を行いました。

「非営利型一般社団法人かたつむり」は 2001 年、小学生の障がい児の保護者が情報を交換し、互いの悩みを相談し合うための親の会 (家族会) として始まりました。当初はアパートを一棟借り上げ、放課後や週末、学校の長期休暇を中心に、革細工、農作業、リサイクル作業等の小規模な活動や、リフレッシュの機会となるイベントを企画。「子どもたちが高校生になる 10 年後に法人化を目指そう」と活動を続けてきました。

2011 年 3 月、いよいよ法人格を取得し本格的な活動の開始を目前にして、東日本大震災により被災し、事業所や設備を流失。理事長ご自身も自宅を失い、再建の見通しが全く立たず、一時は解散も考えたそうです。しかし 3 ヶ月後、建物の被災を免れた 岩手県高齢者福祉生活協同組合 気仙地域センター「すずらん」から手をさしのべられ、「被災して行き場を失くした障がい者やその家族の役に立ちたい」という強い思いから、すずらんと協働により活動を再開したのです。そして、軽作業、リサイクル作業、がれきを利用したキーホルダーの商品制作や、イベントでのポップコーンやソフトクリームの販売など、幅広い活動を行ってきました。

2013 年 5 月にはすずらんから独立。民間団体から支援を受けて、団体関係者の所有地にプレハブの作業所を建て、指定認可を取得し現在に至っています。約 20 名がオリジナル商品の製作や企業からの請負作業を行う他、2014 年に地元の特産「米崎りんご」の栽培も開始しました。りんごの栽培は大変手間がかかり、高齢化や後継者不足でりんご園を手放す

農家も少なくありません。農家から技術を学び、将来は自分たちが担い手となって、潮風に当たってたくましく育つ米崎りんごを後世に残したいとのことです。

かたつむりは設立当初から「居場所のない子どもをつくらない」ことをモットーとし、障がい児たちが、活動を通じて習得した知識や技術を活かして社会に参加することを目標にしています。周辺の福祉事業所で受け入れられない障がい者や重度の障がい者など、地域で孤立しがちな人々も受け入れ、障がい者が自由度の高い、いきいきとした共同生活を送れる場所となることを目指しています。また、日中一時活動としての受け入れも行い、休校日には特別学級の小・中学生も受け入れています。障がい者が達成感や生きがいを持って暮らせるよう、一人ひとりの能力に合わせて作業を決める等、きめ細やかな支援を行っています。

しかし2014年7月、大船渡市の災害復興計画の策定に伴い、2017年度末までに津波の被害を受けない安全な地域に法人本拠地を移転するよう、市から通達を受けました。現在の土地を日中の一時的な作業所等として引き続き使用することはできますが、本拠地を新たに設置しなくてはなりません。利用者数が大幅に増加し、通所希望者も後を絶たないことから、既に現在のプレハブ作業所では手狭（1日20名前後が限界）となっています。そこで、本拠地と作業所の建設費用について、当会とAARにご相談がありました。

恒常的な施設が建設されれば、安全な環境で、安定して作業に取り組むことができます。また、十分なスペースが確保されて利用者の増加にも応じることができ、居場所がなく家に引きこもってしまう人を減らすことができます。利用者一人ひとりに寄り添って活動を続けるかたつむりの地域における存在意義は、非常に大きいと言えます。そこで、新施設の建設に向けて資金面での支援を決定いたしました。今後も主にAARを通じて協力していく予定です。

支 援 先 : 非営利型一般社団法人かたつむり

施 設 名 : @かたつむり (アットかたつむり)

所 在 地 : 岩手県大船渡市赤崎町佐野 84-4(仮設事業所)

事業内容 : 就労継続支援B型(知的、精神、身体)、日中一時支援

代表理事 : 大西 智史氏

利用者数 : 23名

職 員 数 : 8名(パートタイム含む) ※2014年10月末時点

支援内容 : 寄付100万円

(恒久的な事業所・作業所の建設費用の一部として)

振 込 日 : 2014年11月21日

協 力 : AAR Japan [認定NPO法人 難民を助ける会]



左)震災で流失した作業所(外観)

右)以前の活動風景と作品(当時行っていた革細工)



震災後行った調理実習やリサイクル作業
リサイクル作業中、町内の高齢者宅を回って
交流を深め、社会に出る良い訓練となった
とのこと。



プレハブの事業所を訪ねた AAR
スタッフ(2013年12月28日)



かたつむりの利用者と
スタッフの皆さん
(2013年12月28日)



作業室での就労の様子
(2014年6月23日)



施設外就労の様子
食品加工工場で、鶏肉の
ブロック肉を煮物やから揚げ
のサイズに切り分ける
加工を担当する利用者の方々
(2014年6月27日)

(5)福島での防災イベントの共催

防災イベント in SOMA の共催

(2015年3月15日～3月16日、福島県相馬市など)

東日本大震災発生直後の2011年3月13日から緊急支援を開始したAARが、第3回国連防災世界会議(2015年3月14日～18日、宮城県仙台市)に合わせて、福島県相馬市民会館で2日間の「防災イベント in SOMA」を開催。当会は一連のイベントを共催しました。

震災から4年が経過し、被災地以外では、震災に対する関心が日々薄れつつあると感じております。防災・減災の取り組みとして、相馬地方の震災の経験や次の災害への備えを県内外に発信することは大変重要であり、震災の記憶を風化させないためにも意義が大きいと言えます。

初日の3月15日は民謡歌手の原田直之さんと、演芸家の江戸家猫八さんによる「被災地応援コンサート」。2日目は相馬で復興に取り組んできた方々をパネリストとしてお招きし、「相馬地方防災シンポジウム」を開催。2日間でのべ1,100名にご来場いただきました。この「防災イベント in SOMA」に合わせて被災地をめぐるバスツアーも同時に実施し、関東各地から84名の方が参加されました。

《被災地の「今」を知り、「これから」を考えるバスツアー》

これまでAARには、「機会があったら一度、福島をまわってみたい」というご要望が、多くの支援者の方から寄せられていました。実際に被災地を訪れて現地の状況を知っていただくことは、防災・減災に対する意識を高めることにつながります。そこで、当会も「被災地バスツアー」の企画に協力いたしました。

ツアーには合計84名が参加。東京発の大型バス2台と栃木県小山市からのマイクロバス1台を手配し、2015年3月15日～16日にかけていわきと相馬を周遊。非常食バイキング、相馬市民会館での「防災イベント in SOMA」、いわき市スパリゾートハワイアンズでの震災講話にご参加いただいたほか、語り部の方々に被災地域をご案内いただく機会を設け、参加者の皆様に被災地を肌で感じていただきました。

日 程 : 2015年3月15日～16日
旅行企画・実施 : 近畿日本ツーリスト株式会社
企画協力 : AAR Japan [認定NPO法人 難民を助ける会]
社会福祉法人さぽうと21
協力 : 特定非営利活動法人 東京コミュニティカレッジ

【旅程】

3月15日(日)

- ・非常食バイキング
- ・語り部の熊倉 一巳氏による震災当時のお話
- ・被災地応援コンサート 原田 直之[民謡]×江戸家 猫八[お話]
- ・スパリゾートハワイアンズにて震災講話と夕食、
ビーチステージで50周年特別フラショー開催

3月16日(月)

- ・浪江町、南相馬市被災地視察
- ・相馬沿岸部、震災慰霊碑、伝承鎮魂記念館などを視察
- ・相馬地方防災シンポジウムに参加



上)

「こんなにおいしい非常食があることにびっくりしました」「購入する際は参考にさせていただこうと思う」と参加者の方々。

下)

提供した非常食の一部。

大きな缶は25年保存可能なもの。

(2015年3月15日)



バスの車内で、現地協力者が
方が震災時のことなどを話して
くださった。

(2015年3月16日、以下同じ)



相馬市内の震災慰霊碑を
訪れ、弔意を表す参加者



相馬市伝承鎮魂記念館
には、震災に関する資料が
保存されている。



《被災地応援民謡コンサート 原田 直之[民謡]×江戸家 猫八[お話]》

第3回国連防災世界会議の開催に合わせ、福島県相馬地方が地震・津波・原発事故の複合災害を経て学んだ教訓や、復興の過程で取り組んできた防災・減災対策を発信することを目的とし、AARが「防災イベント in SOMA」を開催(当会は共催)。初日の2015年3月15日、民謡コンサートを行いました。

第一部は江戸家 猫八さんによる「まずは健康から」というお話。猫八さんは岩手・宮城・福島の三県で、AARと共に100回を超える慰問活動を行っています。この日は笑うことの大切さを伝えるため、猫八さんの代名詞でもあるウグイスの鳴きまねをはじめ、カエル、ニワトリ、ネコなど楽しいものまねを次々に披露され、会場からは笑いが絶えませんでした。

第二部は浪江町ご出身の原田 直之さんによる民謡コンサートを開催。原田さんはAARと約30年にも渡る長いお付き合いがあり、快くご出演くださいました。「美しきわが故郷」、復興支援ソング「花は咲く」に続いて相馬地方の民謡「新相馬節」「相馬流れ山」「相馬盆歌」などを唄っていただき、一緒に口ずさむ方や目頭を押さえる方もいらっしゃいました。

日 程 : 2015年3月15日 14時~17時
会 場 : 相馬市民会館 (福島県相馬市中村字北町 51-1)
来 場 者 : 約 820 名
主 催 : AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]
共 催 : 社会福祉法人さぽうと21
後 援 : 相馬市
協 力 : 特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ
協 賛 : KPMG あずさ監査法人



お話の合間にウグイスの鳴きまね
をする江戸屋 猫八さん



相馬の民謡を中心に唄って
くださった原田 直之さん

《相馬地方防災シンポジウム》

一東日本大震災から4年 あらためて振り返る当時の対応とこれからの防災対策一

2015年3月16日、「防災イベント in SOMA」2日目の催しとして防災シンポジウムを開催。開会式では、康^{カン}京和^{キョウワ} 国連事務次長補（人道問題担当）兼 緊急援助副調整官よりご挨拶をいただきました。AAR 理事長の長 有紀枝とともに相馬市の被災地を視察された康氏は、「国際社会は福島を忘れてはいない。国連は被災した日本の家族に寄り添い続ける」と述べられました。次に基調講演として、立谷 秀清相馬市長に、震災直後の相馬市の対応と4年間の防災の取り組みをお話しいただきました。立谷市長は、震災直後から今日まで「次の死者を出さない」という目標のもと、すぐに対応すべきことと、再建に向けて取り組むべきことを常に見直しながら復興を目指してきたそうです。また、「今日まで相馬市で孤独死や経済的な理由による自殺を出さないでこられたのは、相馬市の皆さんが一丸となってこの危機に向き合ってくれたおかげです」と、防災・減災、復興における地域住民の協力の重要性を述べられました。

立谷 秀清相馬市長の
基調講演
(2015年3月16日)



シンポジウム第一部では、相馬市出身の方々が地震直後から現在までの経験と教訓を語りました。相馬市消防団 第7分団長の横山 和洋氏、みなと保育園園長の和田 信寿氏、NPO 法人さぼーとセンターぴあ代表理事の青田 由幸氏は、震災当日に市民や園児、障がいのある方々を避難誘導したご経験をもとに、次の災害に備えるための取り組みを報告。また、津波にのまれた経験をもち相馬市震災語り部となった五十嵐 ひで子氏、震災直後から炊き出し等の支援を行った相馬市女性団体連絡会会長の新妻 はつ子氏、県内有数の景勝地だった松川浦の復興に尽力してきた松川浦観光旅館組合組合長の管野 正三氏は、「自分の命は

自ら守るという気持ちを大切にしてほしい」「相馬の経験を後世に伝えていきたい」と話されました。

第二部は相馬地方で働く医師による、医療現場からの報告。南相馬市立総合病院の及川友好副院長は「原発事故と脳卒中」、相馬中央病院の越智小枝医師は「原発事故による健康被害とは」、坪倉正治医師は「相馬地方の被ばくの現状とその対策」、森田知宏医師は「原発事故後の高齢化」についてお話しくださり、会場からの質問にもわかりやすくご対応いただきました。



相馬地方で働く医師の方々。
原発事故の人体への影響や、
高齢者が健康のために注意
すべきことなどをお話しいた
だいた。(2015年3月16日)

日 程 : 2015年3月16日 13時30分~17時
会 場 : 相馬市民会館 (福島県相馬市中村字北町 51-1)
来 場 者 : 約 280 名
主 催 : AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]
共 催 : 相馬市、社会福祉法人さぼうと21
後 援 : 外務省、国連人道問題調整事務所 (OCHA)
2015 防災世界会議日本 CSO ネットワーク
福島民報社、福島民友新聞社
協 力 : 立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科
協 賛 : KPMG あずさ監査法人

(6)震災関連コンサート

被災地での「3.11 祈りのコンサート 2015」の開催支援

(2015年3月11日開催、宮城県仙台市・電力ホール)

2015年3月11日、震災発生から4年を迎えて日本各地で追悼の催しが行われる中、仙台市の電力ホールにも東北のオーケストラや合唱団から有志が集まり、第2回目の「3.11 祈りのコンサート」が開催されました。入場無料の追悼コンサートを運営するために多くの寄付が寄せられ、当会も開催費用の一部を支援いたしました。

この日は4年前を思い出させるような雪の日となりました。降雪と事故のため、東北自動車道が岩手県内で通行止めとなってしまう、盛岡からの合唱団員50名余りが最終リハーサル（ゲネプロ）に間に合わないトラブルも生じたそうですが、無事に午後2時から開演となりました。

2時46分、大地震発生の時刻に合わせて全員で黙とうの後、モーツァルトの「アヴェ・ヴェルム・コルプス」と「レクイエム」の演奏が始まりました。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」は、小品ながらモーツァルト晩年の傑作。有名な「レクイエム」（K. 626）は死の床で書かれた最後の作品で、未完のまま残されたミサ曲です。

指揮・音楽監督は、岩手大学教授の佐々木 正利先生。国内外の楽団と共演してきた国際的指揮者です。オーケストラは、1998年から演奏活動続けるアマチュア弦楽オーケストラの仙台シンフォニエッタ（コンサートマスター 松舘 忠樹氏）に、仙台フィルハーモニー管弦楽団やフリーの演奏家も加わりました。合唱団には、仙台、盛岡、山形のアマチュア団体から150名以上が参加。定員1000人の電力ホールは、悪天候にもかかわらずほぼ満席でした。演奏終了後は拍手喝采の代わりに再び黙とうが捧げられ、各地から駆けつけた多くの方々が、静寂の中で追悼の祈りをともにするひと時となりました。





開催日時 : 2015年3月11日 14時開演
会場 : 電力ホール (宮城県仙台市、定員 1000 名)
開催形式 : 入場無料
実行委員長 : 高坂 知節 氏 (東北大学名誉教授)
副委員長/指揮: 佐々木 正利 氏 (音楽監督・岩手大学教授)
コンサートマスター : 松館 忠樹 氏 (仙台シンフォニエッタ)
演 目 : W. A. モーツァルト「レクイエム」KV.626 他

陸前高田市の子どもたちによる被災地応援コンサートでの発表を支援

(2015年3月29日開催、東京都千代田区・日比谷公会堂)

2015年3月29日、東京都の日比谷公会堂で、日本の唱歌・童謡を歌い継ぐ活動をしている混成ア・カペラ三重唱ユニット「ももたらう」主催の被災地応援コンサート「みんなで歌おう お手てつないで夕やけ小やけコンサート」が開かれました。当会は、震災以降支援してきた陸前高田市高田町の「田村ピアノ教室」(代表=田村 尚子^{なおこ}先生)の生徒を招待し、生徒の皆さんがコンサートに参加して舞台に立ちました。

田村ピアノ教室は、東日本大震災により教室と田村代表の自宅が全壊・流失。生徒約40名のうち4名が津波で亡くなりました。街の再建が進まない中、サンキョー株式会社様のご寄付に基づき、当会は2012年に、地域の文化センター的な役割を果たしてきた教室の再開を全面的に支援。以降も交流を続けてきました。この度は生徒と保護者、引率者を含め

32名を東京に2泊3日の行程で招待し、上記の被災地応援コンサートにて、日頃の練習の成果を披露していただきました。

由緒ある日比谷公会堂の舞台を経験した子どもたち。東京都区内の複雑極まる交通機関を上手に利用して、スカイツリーなどの見学も楽しんでもらうことができました。

コンサートを主催した「ももたらう」のメンバーのおひとり 吉野 真紀さんは、女性重唱グループ「アンサンブル MOMO」にも所属しています。2012年6月にはアンサンブル MOMOにご協力いただき、AARと当会の協同で、岩手県陸前高田市・釜石市、宮城県東松島市の高齢者施設や障がい者施設(合計6ヵ所)においてチャリティコンサートを開催しました。「被災地の方々のことを常に忘れない」という吉野さんの深い思いが、今回のコンサートにも引き継がれていると言えます。

日比谷公会堂は1929年(昭和4年)、関東大震災からの復興のシンボルとして日比谷公園内に建てられ、当時は都内唯一の音楽ホールでした。しかし、老朽化と耐震化の必要性に伴って2016年度に大規模改修工事が計画されており、既に、2016年4月1日以降の利用受付は休止となっています。まもなく役割を終える歴史的な場所で、陸前高田市の子どもたちが、震災を乗り越えて羽ばたく機会が得られたことに感謝しております。

旅 程 : 2015年3月28日~3月30日 2泊3日
参加者 : 田村ピアノ教室 生徒・引率者 32名
(岩手県陸前高田市 / 代表 : 田村 尚子先生)
発表会 : 2015年3月29日 13時開演
会場 : 日比谷公会堂(東京都千代田区)
コンサート主催: 日本の唱歌・童謡を歌い継ぐ「ももたらう」
コンサート共催: NPO 法人 日本の唱歌・童謡を歌い継ぐ「桃の会」
アンサンブル MOMO
コンサート協力: AAR Japan [認定 NPO 法人 難民を助ける会]、社会福祉
法人 さぼうと21、株式会社 東北メディアクリエイション

2015年3月1日、「帰還困難区域」を通過する浪江町~常磐富岡間の開通に伴い常磐自動車道が全面開通するなど、被災地の一部では徐々に状況が改善されつつあります。その一方で、時間の経過に伴って新たに生じた課題も山積みされています。2015年度も、姉妹団体 AAR Japan[難民を助ける会]と協力して、困難を抱えつつ生活再建を目指している方々を支える活動を続けてまいります。サンキョー株式会社をはじめとする多くの方々の温かいご支援に、心より御礼申し上げます。

以上